雪降る日に、とあるカップルの日常

さくら餅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪降る日に、とあるカップルの日常

【Ｎコード】

Ｎ２３０５Ｑ

【作者名】

さくら餅

【あらすじ】

雪の降る日のこと

とある普通のカップルの日常の話です。

（前書き）

新しいキャラで新しいストーリーです
女の子は高校生で男の人は大学生なんです！

こんな日常の物語が大好きです！

それじゃ、読んで下さると嬉しいです

ひらひら

ひらひら、と

ゆきが空から降っている

私の足首まで積もったゆき

白くてとても冷たいゆき

ゆき…

感じでは‐雪‐

そう、その雪だ

そして私の常識の中で雪はけして被って寝るものじゃない

なのに――――――

”ＺＺＺ．．．”

この人はどうしてここでこうしているのだろ…

私の前には雪を被って寝ている一人の青年がいた

（一応知っている人だし、ちょっと見てみよう…）

じーーーーーーーーー

（死んでるのか…？）

いや、むにゃむにゃと言ってるから多分死んではいないようだ

じーーーーーーーーーーーーーーー

（寝てるのかな？）

それにしちゃ顔は非常に白いし唇も元の赤い色をなくして今では青い…

”うーん、どうしよう…”

”………………”

”ZZZ…”

”……………………”

”ZZZ…”

2分くらい彼を見つめた後私は結論を出した

（ほっておこう）

どうしてこんなところでこうして‐寝ている‐のか分らないけど
自分が好きで‐寝ている‐人を何とかする必要はない

行こう

そう思って彼の横を通り過ぎるとする瞬間

”待てーーーーーーー！！”

足首を捕まえられてしまった

”チッ”

”おいおいおい待てよ待て！
普通人が雪の上に倒れていたら起こすとか、
大丈夫ですか？って優しく声を掛けるとか、
病院とかに連れて行くとかするんじゃないんですか？
私たち知り合いでしょう？いや、知り合い所か恋人同志でしょう？！
しかもチッってなんですかチッって！！”

通り過ぎるとした私の足首を捕まえた後立ち上がってからものすご
いスピードで突っ込みを入れている
‐前‐雪を被って寝ていた青年

その青年は彼の言ったとおり私の恋人だ
そして、前に言っておくがすごく変な人でもある

”雪を被って寝る趣味を持った人と知り合いになった覚えはいませんけど・・・”

”僕は雪を被って寝てたんじゃない！た　お　れ　て　い　た　んですよ！”

”あなたは倒れていたとか言っているかもしれませんが私の目で見たとおりには完全に寝ていました！
だから万が一あなたがそのまま凍死したとしても私とは何の関係もないって事ですよ！
なぜならあなたは自分の変な趣味せいで雪の上で寝ていて死んでるだけだから！”

自分の言い方が悪いのは知っている
でも私はまだ昨日の喧嘩で怒っている途中だし
それとあの人はこうでもしないとあんな変で危ない遊びをするから
ここは私がしっかりといえなくちゃ…

”ひどい…ひどすぎますよ”

（あ…やっぱりちょっとひどすぎる言い方だったかな
もう、しないって言ったら許してあげよう）

”そんな言い方はひどいです！
どれだけかと言うと今僕は悲しくて悲しくて涙がとまらないんです！
そしてその涙が凍ってそうじゃなくても寒い僕の体と心をますます寒くしていってそのせいで死ぬそうですよ！”

”うぅぅ…！
全然反省してないんですよね！”

怖い顔をして私の前でグルっと回っている彼を睨む
”ごめんなさいごめんなさいー反省していますって
僕たち恋人同志でしょう？ラブラブですよね？そんなに怒らないでくださいよー”

ぽっ！

（ら、ラブラブって…）

（は、恥ずかしいよー）

（でも、ちょっと嬉しいかもー）

”わ、わわわわわわーーー”

”うん？どうかしたんですか？”

うれしはずかし？態の私を見て彼は心配のように話を掛ける

”な、何でもないんです！
そ、それよりもどうしてまたあんないたずらをしていたんですか？
あんな事してると本当にしぬかもしれないんですよ？！
もう二度としないでください！”

厭きたような顔をして彼に注意する私

”いやーそれがいたずらじゃないって言うか何って言うかー”

”？”

いたずらじゃないってどんなことだろう

…

……

……

……え、まさか？！

そっと彼の額に手を指す

1、2、3・・・暑い！！

こ、ここここれ大丈夫なの？

人が出せる温度なの？

あついよ？すごくあついよーー？

”あ、あああ暑いよ！どうして？ね、どうして？”

”ははは―実は今朝からこんな感じなんですけどねー”

彼の額の熱は普通とは思えないくらい熱かった

”大丈夫なの？びょ、病院いかなきゃ！

た、タクシーを！

あそこまで歩けるんですか？”

”ははは〜大丈夫だいじょうぶですよ〜”

大丈夫のようには聞こえない彼の声と共に私たちはタクシーに登った

タクシーの中で彼に' どうしてそんなに痛いのにここまで来たんですか!' と聞いてみたら

彼は…

”だって…どう考えても昨日は僕が悪かったんですから誤っておきたかったんです

それと、今日はこんなに雪も降ってるから一人で帰る途中に転ぶとかすると怪我しちゃうからね

僕がそばにいてあげないと…”

と言った

私はただ' バカ・・・' としか言えなかった

その後病院に着いて彼は診察を受けた

医者先生は彼のぬれた服を見てこんな寒い日にいったい何をしていたのかって怒りました

…私に

”この前は本当に迷惑になりましたねー申し訳ありませんよー
今度からはちゃんと痛くない日にしますからね！”

”なっ！前に反省したっていったじゃないですか！”

”あの時は反省しましたよー？”

”何ですかそれは！
もう一度あんな事したらもう本当に踏んで行きますから！”

”痛いから嫌なんですが…いや！あなたが踏んでくれるのなら喜んで！”

”あーーーもう！それはもういいです！
はぁ～ね、修二さん”

私はこの前から気になっていたことを彼に聞いてみるため彼の名前を呼ぶ

”はい？”

”前、雪の上で倒れていた時の事なんですけど・・・
どうしていつものように車で待っていなかったんですか？
あそこに倒れていたと言う事は外にいたってことでしょ？”

”ああ…それは
窓から――
あの日は圖書館の窓から可憐の顔が見えたからです”

私の・・・顔？

あ、そういやあの日はいつもとは違うところに座ってたなー

”それだけ？”

”はい、それだけ”

”…バカ”

私は顔を真っ赤にしてそう答えた

”まぁいいでしょ？バカでも

それにしても本当に僕たちは今日もラブラブですねー

ね？可憐”

修二さんは私を向いて笑いながらそう言った

”知りませんよー修二さんは本当にもう…！”

こんな何気ない会話だらけしてるのに

ラブラブ、か

ポッ！

その言葉を聞くたびいつも顔が真っ赤になる

ああ、本当に私はラブラブ(彼)に弱いよねー

（後書き）

可愛いカップルを生み出したいっていつも思っていますが
どうでしたか？
可愛いカップルに見えますか？
そう見えたらいいんですねー

ここまで読んでいただいて嬉しいです
読んでくださったみなさん、ありがとうございます！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2305q/

雪降る日に、とあるカップルの日常

2011年1月22日14時14分発行